

見えな未来は見える過去から



祇園祭も佳境に入った二〇一九年の夏休み、第9回言の葉大賞®の大賞受賞者、京都市立高倉小学校の吉田奈桜さんを訪ねました。審査員会では、当時五年生だった吉田さんの着眼点に評価が集まりました。「未来の自分を描いたとき」というテーマに対し、過去を見つめようという考えに至ったのはなぜか。吉田さんの人柄や、普段の学校生活の様子など、作品の背景を求めて、サマースクールを終えた吉田さんに話を伺いました。



田さん。ご家族の反応を尋ねたところ「高校生になって変わったね、とよく言われます」。自主的な学びはもちろん、陸上部のキャプテンなど、積極的に責任感ある活動は身近な人からも認められているのです。

未来の扉をひらく鍵は今の自分

保健の授業で見たビデオで、世界中に存在する難民の問題と難民をサポートする団体の存在を知り、同時に小学生のときに伝記を読んで心に残っていたマザー・テレサの姿を重ね、自分も世界中で困っている人たちをサポートする夢を育んだ半田さん。

実は半田さんのお兄さんも大きな夢を持って大学で機械航空工学を勉強中だそうです。お兄さんの夢は宇宙飛行士。半田兄妹の夢は地球規模、宇宙規模で膨らんでいます。

まず今できることから始め、知識を増やし、未来への扉を一つずつ開いている半田さん。焦らず着実に「未来の自分」に近づいていってほしいと応援しています。

考えたこと無かったなあと思いました。世界にはそういう問題もあるんだと思いました。働かないといけない子どもたちや、紛争地帯から国境を越えて病院設備の整った国に行つて出産をする人たちの記事を読んで、そういう人たちがいるのなら、その人たちを助けたいなと思いました。

切り抜きで勉強するといった自主的な学びの姿勢は、久留米高校の「NEWセサミプラン」で鍛えられたものでしょう。「受験勉強の合間にこうやって知識をためておこうと思つて、やっています」と半

中国当局の民主化運動に対する姿勢の変遷など、自分で調べたことが半田さんの字で丁寧に書き込んでありました。ネットで調べたことをコピー&ペーストするのではなく、自分の字で書くことで頭入るのです。

新聞を読み始めたことで、ニュースが理解できるようになり、楽しくなつてきたそうです。「テロリストの子どもたちを育てる学校ができた」という記事を読んだ、こういう目線があるんだと気がきました。テロの連鎖を無くすためにテロリストの子どもたちに教育を与えるなんて



授賞式でマイクを向けられドキドキ

今の自分に出来ること

第9回言の葉大賞®大賞

京都市立高倉小学校 吉田 奈桜

「未来の自分を描いた時」というテーマを見て、未来の自分とはよく分からないし想像できないと思いました。だから、今年が平成三十年。逆に三十年前のことを調べようと考えました。

お母さんに聞いてみると

「一番変わったのは、通信機器やコンピュータが発達したこと」と言いました。

三十年前はスマホはなかったし、各家庭にパソコンもなかったそうです。今のようにパソコンでなんでも調べることができません。それは、不便だなと思いました。

次にお父さんに聞くと

「三十年前の夏はこんなに暑くなかった」

と言いました。

そのころは教室にエアコンもついていなかったそうです。そんなこと私には考えられません。

では、三十年後はどんな風になっているか考えてみました。今よりもっと便利になってAIがさらに発達している。みんながそれに頼ってばかりになっているのではないか。また、地球温暖化が進んで今より住みにくい世の中になっているのではないか。

そう考えると今私がやるべきことは、しょう来AIに頼るのではなく自分の意志をしっかりと持ち、行動できる力をつけることだと思います。

また、住みやすい世の中になるように人まかせにせず自分もエコの取り組みに参加していきます。

これからは

「自分の意志をもつ」

「人まかせにしない」

という言葉を意識して生きていきたいです。

ら、今年が平成三十年。逆に三十年前のことをまず調べようと考えました」

これは吉田さんの作品の冒頭箇所です。応募作品の多くは未来をテーマに「職業観」や「将来の自分像」が書かれていま

した。しかし彼女は、未来のことはまだ小学生である自分にはわからないから、三十年前を知る父親と母親に過去を尋ねました。そしてすごいところは、そこから未来は過去からの延長線上にあると考

未来を過去から考える

「『未来の自分を描いた時』というテーマを見て、未来の自分のことはよく分からないし想像できないと思いました。だから

生。大賞を受賞した小学五年生の三月、授賞式当日は壇上で緊張していたのか、なかなか笑顔を引き出せませんでした。この日姿を見せた彼女もまた、少し緊張気味でした。学年が変わっても、落ち着いた様子は変わりません。しかし数ヶ月前に高倉小学校を訪れた際、彼女はクラスメイトと楽しそうに運動場を走り回っていました。「緊張すると思うけど、担任の先生も一緒だからリラックスしてね」と伝え、インタビューを始めました。

読書が趣味だという吉田さん。講談社の「青い鳥文庫」シリーズを以前から愛読しているそうで、放課後や休みの日などの自由時間も、どちらかと言えば本を読むことが多いとか。物語形式のものが好きで、「いろいろ読んだけど、記憶に残っている作品だと赤毛のアンが好き」と語る彼女からは笑顔が見られました。小説だけではなく、もちろん漫画雑誌なども読む、そのときは小学生らしいあどけなさも感じました。

活字離れと言われる昨今ですが、読書が好きな彼女だからこそ、様々な文体を自分の中に取り込み、自然に文章に落とし込めるのでしょう。さらに、小学生らし

い素直な意見は、読む人にストレートに訴えかけるのでしょう。読書については実のところきつかけがあったそうです。四年生のときに自分のクラスのすぐ隣に図書室があったのが、本をよく読むようになったきっかけだったとか。当時も吉田さんを受け持っていた、担任の備後友加里先生によると、彼女は毎日のように図書室に通い、大好きな本を読んでいたそうです。



読書が大好き

え、三十年後の未来を考えてみるというところ。この現在を起点とした過去と未来への視点の広さは小学生離れしており、発想力と考察力に富んだ見事な作品でした。そこが評価され、言の葉大賞史上初の小学生での大賞となりました。

今吉田さんは小学校最終学年の六年



小中一貫教育で育まれる力

吉田さんが通う京都市立高倉小学校と近隣の御所南小学校、御所東小学校の三校は、京都市立御池中学校と連携して、小中一貫教育^{*}を実施しています。小学校の六年生になると、慣れ親しんだ小学校の

校舎から六百メートルほど離れた御池中学校の校舎に移動し、中学校と合わせて四年間の学校生活を送ります。

※言の葉協会CONCEPT BOOK 2017春号「未来に輝く小中一貫コミュニティ・スクールの創造」参照

在学中に身に着けるべき力を「自ら見つけ、自ら考え、学んだことを実社会や実生活に生かす力」と掲げ、学校や地域の特色を活かし、地域ぐるみで取組みの充実を図るため、小中合同の学校運営を行っています。

吉田さんは、作文を書くにあたり、「初めは、AI関連のことについてインターネットで調べたことを書いていました。でもインターネットで調べるよりも、人に聞いた方がより詳しく分かるかなと思っただので、両親に聞いたことを中心に書き直しました」と話していました。自分自身に疑問点や課題を持ち、解決に向け自身の力で調べることはとても大事な作業です。しかし、その調べた情報を鵜呑みにするのはなく、様々な角度から自分なりに検証を行うことも大切です。この二つの力が時代に求められていることなのだとしたら、彼女は実践力を身に付けていると言えるのではないのでしょうか。

これから広がる夢

吉田さんの緊張がようやくほぐれて表情が緩んだ頃、少しプライベートについても質問してみました。好きな運動は「水泳だけ」だそうで、水泳以外は苦手なのとか。週四日で塾や習い事をしているので、放課後は真つすぐ帰宅するそうです。海外に目を向け、国際理解にも興味関心があると言います。今行ってみたい国はマレーシア。これは最近読んだ『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ』(こまつあやこ著・講談社刊)という本の影響だそう。この本は、マレーシアからの帰国子女となった中学二年生の女子生徒が日本の中学校に順応しようと四苦八苦する中、短歌に出会う様子が描かれている児童文学です(タイトルはマレー語で五・七・五・七・七の意)。

将来の夢を訪ねると、「具体的にはないけど、子どもに関わる仕事がしたい」と答えてくれました。備後先生はそれを聞いて「そういえば小学校四年生の学校行事に近所の幼稚園児が来ていた時、楽しそうにみんなで遊んでいたよね」と振り返っていました。

書き直す度に考えが深まった

実は作文を書き始めた当初、彼女は「普通に将来の夢を書くつもりだった」と言います。「下書きの時に何回も書き直して、最後にこの文章にたどり着きました。何度もやり直す中で、『普通に書いたら面白くないなあ。たぶん、みんな同じように書くだろうから、いっそ逆の事を考えてみよう』って」。当然過去のことは知らないことばかりなので、色々と過去について調べてみた中で、「最も印象深いのはパブル景気のことです。なんか、今より華やかな感じがしたので。そうやって将来を考えるに当たって過去のことを調べていく中で、両親に昔のことを聞いてみると、より過去のことが分かってよかったです。三年生の時から三年連続で応募していますが、今回の作文が一番テーマの

意味をよく考えて書きました」と文章構成の変化を教えてくださいました。

最後にこんな質問をしてみました。「三十年前に吉田さんが生まれていたら、どんな人生になると思いますか。すると、『たぶん、三十年前の世界も私なりに楽しめると思います』という答えが返ってきました。

ました。なるほど、実践力が身に着いている彼女ならではの回答だと感じました。受賞作品の中にあつた「便利なものに頼り過ぎることなく、自分の意志をしっかり持って行動する力」は、時代が変わってもそう変化しないものだ、改めて吉田さんから教えてもらいました。



担任の備後友加里先生と一緒に、御池中学校内の教室にて

今回の作文が一番テーマの